

この傷がせめて手足か体に受けた傷だったら、我が子を抱くこともできたろう、孫をあやすこともできたろう。我が子への愛すら知らぬまま、私は八十五歳の不運の人生を終わろうとしている。

五年前、腰椎の圧迫骨折で歩行が不自由となり、養生の結果、今では、ほんの少し歩けるようにはなったのですが、小用に立つことさえ困難になった時、私は誰の看護を受けることになるのか。私の希望は、動ける間に先祖のもとへ行きたい。永い辛抱への償いとして、それくらいは許されたい、それだけです。

初年兵の思い出

石川県 石田 一郎

① 赤紙再検合格、釜山に渡る

私は赤紙召集の昭和十九（一九四四）年兵の一人です。ポート部での過激な運動のため肋膜炎を患い、第三乙種でした。赤紙では「十月一日、門司集合」と書いてあったので、小学校の村尾先生の親戚の床屋さんへ前日に行って世話になった。翌日小学校で再体格検査がありほとんどが合格でした。

運動場へ通じる廊下を通り、各教室の窓口に古参兵の一人が立っていて、「大」と声をかけられたら各教室の窓口で「大」と言って「大」の衣服を受け取り、運動場で軍服に着替えろということでした。外へ出るとまた古参兵がいて、他の者とそれぞれ適当に交換して頭の大小、ズボンの長短をチャンとせいと言うことでした。しかし日本の軍

人として見られる格好ではなかった。

このあと銃器の受領で、三八式歩兵銃、帯剣、飯盒、竹筒の水筒、軍靴は先の丸い地下足袋、防寒靴下、そして背囊などを受領した。そのあと三種混合の注射を打ち、二、三人ずつに別れて、提灯を下げた町民の家に二晩民宿した。

門司は既に爆撃を受け、アチコチの電柱が斜めに倒れ、市街は真っ暗だった。暁の六時出航の関連連絡船に乗船、一般人も乗っていたが、我々は三等船室という船底に缶詰にされ身動きもできなかった。丸窓から巡洋艦が見えたが、大変なことに、玄界灘が何十年ぶりに大荒れとなり、海水が怒涛のように入って来て、救命具をすぐ身につけるよう命令された。しかし習いたてだったので皆すぐ身につけることができた。

水量が増えてもう足が底につかなくなり浮いたままとなった。したらアチコチで船酔いのためゲロゲロ吐く者が出て来て、汚くて汚くて、手ではねのけ入口の方へ行くと、大きな波のような海

水をかぶり押し返される。

船はこのまま沈むのではないかと心配したが、翌朝の七時頃釜山港に着き、正午まで大休止ということになった。そこで着替えて背囊をまくらにぐっすり寝込んだ。夕方の四時になり集合し、今度は乾燥した草藁を敷いた有蓋車にすし詰めになり、外からはビシヤッとカギを掛けられ、間もなく発車した。どこをどう走っているのか皆目解らない。時々平原の無人の原っぱで止まり、用便するよう命令された。食事は原っぱに止まった時に用意されていたのか赤飯の大きなおにぎりが竹筒に入れられて支給された。

② 柳河教育時代

行く先は知らされなかったが、山海関を通過して北上し、徐州の一つ手前の柳河と言う所に着いた。ここに駐留していた騎兵第四旅団に補充され、驚いたことに我々新兵を迎え入れるために全員整列して閲兵式が行われた。ここで臨時教育、即ち

騎兵の教育を受けることになった。我々は六個中队に分散、私は第四中隊の第三小隊に配属され、直ちに豚革だが長靴とダブルの制服、内側に革の着いた乗馬ズボンが支給されて、皆騎兵隊の立派な兵士になったと喜び合った。

直ぐ馬の手入れに行けと言われ、一人一人日本名のついた馬の手入れに馬房へ向かった。ガヤガヤ言いながら馬屋に着いたら、髭もじやの古参兵が出てきて「貴様等、古参兵が馬屋当番についているのに、ご苦労さんの一つも言えないのか」と言われ、皆「ご苦労さんです」と言う。「ナンダ、そんな小さな声しか出ないのか」とゲンコツで一人一人殴られた。これが最初の罰だった。

この二カ月の教育中、馬の手入れの失敗談は数え切れないほどあるが、北支の冬は気温が零下二〇度が普通で、色白でポチャポチャした身体の男はよく霜焼けになる。古参兵が時々馬の手入れ用の道具を二、三本隠すので、ヒビの切れた手で馬房の寝藁を両手でかき集めキレイな藁と取り替え

る。この際バクテリア菌がヒビ割れから進入して、遂には指が見えないほど。ポンポンに腫れて何もできなくなる。

初年兵は古参兵が演習から帰って来ると、いち早く各馬に立ち寄り、馬具をはずして汗を拭き、蹄洗桶に零下二〇度の水を汲んでまずドロを落とし足を洗う。鉄平で四肢のヒヅメのドロをかき落とし、藁で足の裏底をキレイに拭き、油を塗って、キレイな寝藁を敷き詰めた馬房に引き入れて飼料を与えるのである。勿論飲み水も与える。これが毎日午後の日課だったが、不思議にヒビ、霜焼けになる者が一人も出なかったのが不思議だった。

ある時、突然に銃器の手入れ作業があった。銃身を手入れする薬莖手入機の数が少ないので、作業ストップが掛かった時は、ほとんどの者が手入れ不良で、安田班内上等兵は皆を向かい合わせに二列に並ばせ、對抗ビンタをやるよう命令する。お互い顔見知りだから相手の頬を軽く撫でていた

ら「そんなたるい叩き方では駄目だ」と近くの兵隊を殴り倒した。そこで真剣に殴り合いとなり、取っ組み合いとなったので中止となった。

分隊長の馬は元競馬馬とかで、すごく気が荒く、初年兵の誰にも手入れすることができないと言うので、お鉢が私のところに廻って来て、今日から分隊長の馬の手入れをするよう命令を受けた。馬房の馬には、蹴る馬にはシッポに白い注布を、噛む馬にはタテ髪に赤い注布をつけてある。ところで分隊長の馬には何もなく、しばらくニラミ合っていたが、私が馬房の横から入る時も何も反抗しない。首筋を叩いて静かにブラシをかけ、その他の手入れをするのに少しも騒がない。お陰で、それ以来、分隊長の馬手入れ専属になった。

教育は、午前と午後交互に、乗馬訓練と歩兵訓練がありました。二週間、後歩兵訓練で銃剣術の練習があったが、銃剣術の型がいいと言われ、その後、早稲田出身の新小隊長の剣道の相手をする

よう命ぜられた。

小野寺分隊長は幹部候補生教育のため私をはじめ古川、芳賀の三人を毎日消灯後、十二時頃に歩哨に起こさせ、分隊長の部屋で歩兵操典その他のものを暗記させられた。

試験があつて、私が序列二番と言うことで、非常に喜ばれ、今でもその顔が思い出される。

乗馬訓練で一番つらかったのは裸馬に乗せられたことである。馬の背骨が尾骶骨にあたって痔になる者が多かった。尾骶骨が痛いので、どうしても両足で馬の胴をはさんで尻を持ち上げようとする。革の張つてある乗馬ズボンだが、内股の皮が赤く腫れて来て皮がむけることもあつて風呂に入れず、顔を水で洗つて入浴をすませたことになったものです。

このため鞍を置いて乗馬した時には楽でどうしても居眠りをする。頃合いをはかつて分隊長が「駆け足」と号令をかける。と、馬は一斉に走り出す。すると居眠りしていた者は皆落馬して馬に引きず

られてゆく。あぶみにかける足が規定の爪先三寸、足の三分の一しかかけてはいけないということを守っていない者が全部、アブミに足を引っかけたまま馬に引きずられて怪我をする。

アレヤコレヤで二カ月の教育期間はアツという間に過ぎ、十二月の半ば柳河を後にして北京、南京を経て、漢口の日本租界に入り、軍の弾薬の分散作業に従事した。

③ 嘆口での生活

柳河の騎兵隊は最初の時と同じように、全員整列して閲兵して送り出してくれた。我々は浦口線に乗り、武昌で船に乗り替えて嘆口に入った。

B 29の爆撃の中、弾薬庫の弾薬を手渡しで安全な個所に移動した。B 29の投下焼夷弾の空の十床が十人ほど左にいた東海道二等兵の頭を直撃、彼は即死した。宿舎に臨時に二段の祭壇を作り、饅頭や果物を供え、衛戍衛兵が立つことに決定した。ところがいやな事に、この衛戍衛兵が供え物の饅

頭を皆食べてしまった。運悪く巡察将校がこれを見つけて叱責、鳥籠のような大きな籠を重衛倉の代わりを作り、これに営倉衛兵がついた。今度は何も起こらぬよう祈っていたが、明日から日本人の親爺がやっている軍需酒造会社の使役をするこ
とになって、すべてがご破産となった。

酒造りは最初米を洗って大きな桶の中にすれすれになるまで入れ、筵を二、三枚被せて蓋をする。見事な事に二十樽も並んでいた。

翌朝早く親爺さんがハシゴを掛け、筵を除けて一握りの湯気の上がつている御飯を手の甲でつぶしながら伸ばす。餅のようになったら合格である。鬼の履くような大きな下駄が並べ掛けてあるのは、この大樽の蒸し上がった熱い米の上を歩くのを使うのだと聞いて納得した。上に乗るのが二人で、下からみんな空の桶を上げ、蒸し上がった米を土間に敷き詰めた筵に投げて、横に広げる。

固まった米を平らに直し米が筵に全部埋まったところで全員で米の固まりを両手でほぐす。その

時サツと古参兵の眼を盗んで口の中に放り込んで食べる。米倉にあるタクアン桶からタクアン一本引き抜く。

蒸し米をスコップで空桶に入れる作業をしている連中が、下へ下へいくと、底に残る米がちょうど粥餅のようになる。これを盗んで、タクアンをかじりつつ食う、この粥餅がともうまい。下の者が「オーイまだか、何しとるんじや」という。そこで下の者にも分け与える。

ところがこれが大変な事になった。この餅ごはんと敷藁に敷いた固まり飯を食べたため、夕食に支給される飯盒一本の飯と粕汁が腹に入らなくて、素早く木綿袋に余った飯盒飯を入れ、あとで水汲みの使役に来ているニーコと饅頭との交換をする。炊事場ではコゲ飯をニーコにやっているの、饅頭との交換は炊事場にまわした。

清酒ができるまでこの作業に従事した。乾いた筥の米を十枚一桶ずつ入れ、酵母菌を入れ水を少し加えて発酵させる。一カ月程経つと、もうブク

ブク泡を吹いて発酵する。ちよつとの余裕もない。もう汗だくだくで吹く泡を叩く、そしていよいよ酒シボリである。厚手のドンゴロスを縦長に二つ折りにするとキッチンと木枠に入れる。上から押さえるローラー付きの蓋板が下りて来て、ピチツと蓋をして、穴の空いた所へ太く長い棒を指し込んで搾ってゆく。一番下の箱にあけた丸い口が開いて、そこから清酒がコンクリートで作ったプールに溜って来る。親爺さんに少しずつ廻し飲みをさせて貰ったが、非常に甘くて美味かった。

漢口でのもう一つの思い出がある。B 29の爆撃は弾薬の分散が終わってから回数は少なくなった。そこで街の道路沿いで歩兵の訓練があった。中でも匍匐前進中に東道軍曹の「ガス」と号令がかかると、防毒マスクを顔に取付け、しかもマスクをしたまま匍匐前進だから息が苦しくて、少し口許を外して、軍曹が近づくとまともにかぶった。この訓練が毎日続いたのはうんざりした。

私はあとで知ったことだが、我が原隊、即ち独立輜重第四連隊の受領員三人、平塚与介軍曹、東道寿貞吉軍曹、遠藤茂軍曹が柳河に既に来ていたと言う事だった。輜重兵であるのに何のために騎兵・歩兵教育を受けたのか、本当にがっかりした。

四月中頃、いよいよ桂林に向かって行軍を開始した。

④ 桂林への道

行軍は夜行軍で鉄道線路伝いに歩いた。中国はちよほど不作で、行く先々の兵站では米は無く、乾パンだった。だから次第に靴下に詰めた米を食べるようになった。お菜は無く、岩塩と粉醤油を水に溶かして飲んだ。辛い病人は一人も出なかった。

桂林へ着いたのは七月半ばで、ちよほど三カ月歩いて来た事になる。大体百日の予定だった。この三カ月の行軍中の出来事で特記すべきものはなかった。

すぐ、湖南作戦の残党討伐とテントでくるんで

ある部隊貨物を車ごと引つ張って来るということで、到着した新兵の中から頑強な兵隊二十人が選出され、その中の一人に私がいた。分隊長となる指揮官は下士官候補で、全員完全武装、実包を弾込めしてゆく。「これからの行軍は全部徴発でゆく。部落を見つけたらワシが命令するまで発砲するな。いつ敵襲を受けるか判らんから五人を尖兵隊とし、本隊の十メートル先を行く」と。

はじめての部落を見つけた。分隊長は実包を空へ向けて射てと号令。一斉に空へ向けて鉄砲を撃つと、部落民（大体年寄りの男女）が、ブタ小屋やニワトリ小屋の戸口を全部明けて逃げてゆく。空き家に飛び込んで誰もいないことを確かめ、食べ物や物色する。ご飯の残りやおかずの残りを皆でばくつく。鶏を捕らえて、その日の晩飯のオカズにする。生まれてはじめて鶏の毛をむしった。夜、火をたくと敵の目印になるので日暮れの早飯となる。こんな調子で進攻して行った。

はじめは問題は起こらなかったが、いくつ目かの大きな部落に来た所、日の丸の旗を振って「リーペンパイ、バンザイ（日本兵万歳）」と我々に好意を持って迎えてくれた様子であったのが、十五メートルほど過ぎた時、その部落民の若者が軽機関銃で突然バリバリ撃って来た。すぐ応戦「軽機、前へ！」「狙撃兵は敵の機関銃兵を狙い撃ちしろ！」と、銃撃戦は結構長く続いた。

その時一発の弾が私の腹にあたって「天皇陛下万歳」と言ったか「母ちゃん万歳」と言ったか覚えはなかったが、一応戦闘が終わって建物の影に寝かされた。私の顔を覗いて「オーイ！ 石田、石田」と呼んでいる声に目が覚めて「どうしたんですか」と聞くと、分隊長が「コレ見ろ！ 千人針の五錢玉でお前は助かったんだ」と。見ると右側の五錢玉がバラバラになっていた。戦後この千人針のお陰だと鶴来白山比呼神社の朔日参りを現在まで続け、三年前に三十周年の朔日参りの表彰を受けたのも後日物語である。

その後も徴発を続けつつ二週間後位に部隊貨物のある所に到着した。ある部落に積み上げてあった赤土が実は黒砂糖と分かって、皆が水筒に詰め、暑かったせいもあって水と一緒にガブガブ飲んだ。すると一時間も経たないうちに、その砂糖水を飲んで者が次々と下痢を起こした。すると分隊長が、竹の小枝を集めて来て竹炭を作って飲ませたところ忽ち下痢が止まったのには感嘆したものです。

部隊貨物は、無人なのに誰も盗んで行かなかったのが不思議だった。中国は広軌鉄道で貨車も大きく、荷物はさほど大きなものではなかった。これをどうして引つ張ってゆくのかと思っていると、分隊長が皆で歯止めをかけながら、二センチ三センチと押し上げてゆくと言う。これでは何日かかるだろうと心配であったが、下り坂になると貨車に飛び乗る。上り坂になると全員一斉に声を出し合って死に物狂いで押し上げて行く。

「腹が減っては戦ができぬ」と、分隊長が部落へ行って豚肉を持ち帰ってきて盛大な晩餐会とな

った。数日後に本隊に到着したが、帰りの方が何か早いように感じた。

⑤ 満州へ向かったの大移動

帰って見ると残留組の初年兵は各中隊から小隊と、各分隊へと配属されていた。私は確か第四中隊第三小隊の第六分隊へ配属された。そして「安男」と言うチャン馬が持ち馬として与えられた。ところが村中分隊長から「急に満州へ移動する、しかも百日で行け」ということで、地図に直線を引いて山、川、田畑を横切って夜行軍で行動するということだった。馬は百貫の糧秣や弾薬を背負うということとで、早速弾薬百貫を積むことになった。一人が馬の轡くわをしつかり持ち、横から二人ずつで鞍の台座に掛け、素早く輜重結びでケンレンコウに引っかける。

この作業は柳河時代に教えられたというが、私は小隊長の剣道の相手をしていたのでぜんぜん知らない。そのため片方の弾薬がドスンと落ちて、

馬が横倒しになって倒れた。ロープでこっぴどく殴られたことは言うまでもない。

あの桂林の槍のような山々を踏波して行く。私の馬の「安男」は百貫の荷物を積みながら、あの鉄の蹄で私を首でグイグイ押し上げて登ってくる。蹄の足をどの岩角にかけたら滑らないか？ その動物感と言うものには感嘆した。しかし下りになると今度は誠に慎重に降りて来る。これも動物の持っている感と言うものだ。何しろ地図上の一直線を歩くのだから山や川は勿論、ほとんど田畑を横切って行動する。

私は運悪く「安男」の後から前足での踏み掛けで左足の踵が腫れ靴が履けなくなつて、予備駄馬に乗せられて行軍することになった。二年兵の奥村一等兵が飯を運んで来た時に、「お前のために俺は人一倍仕事が増えた」と言っていたのを聞いて、何とか一日も早く馬から降りて歩きたいと願った。

分隊の中に柴田上等兵と言う十三年兵がいて、位が上の村中伍長分隊長を「オイ村中、オイ村中」と呼び捨てにしているのは驚いた。どの隊でもそうであつたかは知らないが、「ニーコ」（中国の子供）を捕まえて自分の背囊その他重い物を天秤棒に乗せて連れて歩いてた。そして次の部落へ着くと駄賃（物品）を支払って、代わりの「ニーコ」と交替して歩く。

行軍中一番辛かつたのは馬の落鉄で、分隊にいる工務兵に新しい鉄と取り替えてもらうのだが、馬は百貫の荷物を背負っているでなかなか足を上げない。爪の裏表面をヤスリで平らに削り、鋸を打つまでの僅かの時間であるが、その間、馬は三本足では非常に苦しいらしい。

終わって落鉄の検査をやつたのかと問われて「十分間の小休止に十八頭の水飼と落鉄の検査はできない」というと、「もっと早くやれ！ この馬鹿野郎」と金槌で頭を殴られ目から火が出た。

筏井と言う初年兵と落鉄調べと水飼を交互にや

つていたが、彼も数度金鎚で殴られたので、戦争が終わって日本に上陸したら、二人で岩本工務兵を殺害する約束をした。あとの話になるが不履行に終わった。

各分隊から初年兵が出て糧秣受領に行くのだが、各兵站は米不足で、メリケン粉と乾パンしか支給されなかつた。ある時糧秣受領に行くと、見渡す限り馬と新兵の群がり、これではいつになつたら、糧秣が貰えるか判らない。ところが二頭の馬に糧秣を積んで木につないであつた。自分等の馬に受領伝票を馬の胴腹にはさんで、糧秣を積んだ馬に飛び乗り、一目散に逃げ帰つた。後刻何の音沙汰もなく胸をなで下ろし一安心した。

馬の蹄鉄交換のため二十日間の大休止があつた。初年兵は古参兵の軍靴の裏の鋸の土を取り、洗つて油をつけて置く仕事辛かつた。さらにひどく辛かつたのは「ゾウリ」を作る事だつた。藁を集め、藁に霧を吹きかけ叩いて藁を軟らかくする。そして縄をなうのだが、これは街育ちの私には至

難の技だった。一年上の上田一等兵に教えて貰うのだが、右縄はできて左縄はなえず往生した。ゾウリを編むと子供の履くゾウリになったり、象の履くゾウリができたりで大変苦労した。

⑥ 終戦の知らせ

二十日間の大休止も終わりいよいよ出発、一週間ほど経って武漢地区へ入った頃、誰言うことなく終戦になったという話が伝わって来た。

後日、各中隊長が居並び、連隊副官が終戦の詔書を持って来て、初めて正式に終戦を知った。私の足は二十日間の大休止のお陰ですっかり良くなった。

確か長沙だったと思うが、銃剣はもとより兵器は、弾薬や手榴弾は別にして山のように積み上げられた。しかし終戦の悲しみや遺恨等少しも起こらず「アー、これでやっと日本へ帰れる」と言う安心感が心がふくらんだ。

⑦ 半年の収容生活

武装解除後は、武昌の山奥の「馬橋」と言う所で一冬越えての捕虜生活に生き永らえた。別に強制労働等はなく、中国の米作が不作で、アメリカ包装のメリケン粉しか与えられず、出稼ぎに出ることになった。前の「ゾウリ」作りと同じ部落で、牛による田の土返し、水汲み、そして最後にロバと一緒に豆引きなどで、ここでは百姓出の人は優遇された。私も失敗しながらも一生懸命にやった。

誠意が届いたかよく御馳走してくれた。そして「ミンテン、オーデ、ポンユウ、カンホライライユイ」かと聞くと「ミンテンライライユイユイ」と答えてくれ、帰りにおにぎりまで持たしてくれた。それでささやかなお礼として、軍手、軍足を差し上げ喜ばれた。

私達初年兵も古参兵も皆、あの暑い桂林の被服のまま、柴田古参兵が主計少尉を呼んで「冬の衣類を兵站を廻って貰って来い」と叱りつけていました。ところが全部他の隊に取られて破れた外

套とかで我々小隊を乞食部隊とのしられました。それでも汚い駄馬の荷台用に使った毛布を何枚か着せあつて寒さをしのいだ。

柴田十三年上等兵は物凄い見幕で文句を言っていた。軍隊と言う所は十三年以上の年数の兵隊は階級を物ともせず、命令的に物を言つても罰せられない所だと不思議に思いました。この事が一番感心させられた事は後程語る伝染病で博多港に上陸できなかった話です。

捕虜の中の残留組は、一日乾パン一袋と飯盒の中皿位の薄いパン一枚の生活だったから、我々は出稼ぎの部落の主人のお陰で命をなげらえられたと言つても過言ではないと思う。

約半年の捕虜生活もいよいよ終わりに近づいて来たようで、乗船名簿作成（ローマ字）と言うことで、私は本部付勤務と言うことになった。ここではどうしたことか食事の質が全然違うのには驚いた。私の外にも二、三人いた。

⑧ 『馬橋』より上海へ

七月に入つて徐々に「馬橋」を立つ部隊が増えた。間もなく我々も上海へ運送され、宿舎に案内され、乗船命令が出るまで待機することになった。関東、関西部隊が次々と乗船して行くが、どの部隊も上から下、そして背囊、水筒、軍靴等すべて真新しい衣類や装備をまとつて乗船してゆくのが、何とも羨ましかった。二日後に我々の部隊の乗船準備の命令が出て、身体中が熱くなつて思わず笑みがこぼれた。

乗船前に部隊長より「長い間労苦をかけたが、前にも言ったが、日本の地、博多へ上陸するまで軍隊の階級制度を続ける」との訓示があつた。いよいよこれで自由になれるんだ。

我々の乗船が湾外に停泊、医療検査のためアメリカ医師による臨検が始まった。しかしなぜか医者に乗せて小船は帰って行く。伝染病患者が、出たとついで、我々の船はまた沖へ出て駐留したのである。船底に積み上げてあつた生のトウモ

ロコシを食べて赤痢になった者がいたのである。

例の十三年兵の柴田上等兵は「何をやっとなるじゃ、そんなものは員数検査だから誰か替え玉を出して検査を受ければ通ることだ。こんなところに一カ月もおれん。考えて見るバカモン」とわめく。事実不思議にも二回目の検査で全員無事上陸できた。

上陸するなり頭からDDTの消毒剤をかぶった部隊長は全員を集め「これをもって軍人の階級制度を解く。長い間ご苦労であった。解散！」

支給された報奨金は一人三百五十円だった。そして二週間の停泊中、満足の食事が与えられず体力が消耗した。そして大阪まで行く無料の列車に飛び乗った。大阪駅周辺は『闇市場』と言う看板が、アチコチに掲げられていた。我慢できないほど腹が減っていたので、太巻を三本食べ、うどんも食べた。そして北陸線富山行きで小松までの切符を買い、電報を打とうと思つて郵便局へゆくと「電報より貴方の方が先に着きますよ」と言われ

諦めた。金沢の自分の家へ真っ直ぐ行かなかった理由は、下着から服まで買って、小松の本家で銭湯に入り、サッパリした気持ちで、金沢へ帰ってきたからで、これは事実計画通りにいった。

金沢の家に着いたのは、昭和二十一年六月十五日であった。実に一年八カ月、中国全土を往復して来た。思い出したくない思い出はこれで終結した。